学園だより
名古屋電気学園
愛知工業大学
愛知工業大学情報電子専門学校
愛知工業大学名電高校
愛知工業大学名電中学校

目次：

学園葬弔辞 2
17氏が名誉教授に 3
高い就職率を維持 4
夏の甲子園で勝利 5
高校卓球3連覇 6
41回目全国大会へ 7

発行所
名古屋電気学園
〒470-0392
豊田市八草町八千草1247
TEL (0565)48-8177

学園総長・後藤淳先生の学園葬を斎行

六月一日に九十歳で逝去した学校法人名古屋電気学園総長、後藤淳先生の本葬告別式「学園葬」が七月三日、名古屋市千種区の覚王山日泰寺で営まれました。学園の後援会組織である名古屋電気学園愛名会の元会長・神尾隆氏が葬儀委員長を務め、葬儀と告別式に合わせて二千三百五十八人が参列して先生のご冥福をお祈りしました。

日泰寺に到着したご遺骨、お位牌、ご遺影がご遺族から神尾委員長に伝達され、午前十一時半から葬儀が始まりました。

供花に囲まれたご遺影

弔辞は、先生と同郷の長野県須坂市出身、遠藤守信信州大学特別特任教授・愛知工業大学客員教授が読み上げました。

遠藤教授は、先生が生前に見せた名電高生との心の触れ合いなどに触れ「今は天国で学園の発展を見守ってくださっていることでしょう」とご遺影に語りかけました＝**2面に弔辞全文**。

程永華駐日中国大使らの弔電が奉読された後、読経が流れる中で焼香が始まりました。先生の生前の幅広い交友を反映し、大村秀章愛知県知事ら政財界、教育界、中国総領事など日中友好の関係者ら二百二十七人が次々とご冥福をお祈りしました。

読経に続き、神尾委員長が式文を読み上げ、教育・スポーツ界や日中友好の分野で果たしてこられた先生の業績をたたえました。

最後に神尾委員長と喪主の後藤泰之理事長が挨拶に立ち、後藤理事長は「先月一日、一時帰宅がかない、自宅へ戻り、その途中には人一倍思いの強かった愛知工業大学名電高等学校へも立ち寄り、車内から手を振るほど元気でした」と、ご様子が変わる前の先生の最期の一日を振り返り「学園のために何事も真っ向勝負でぶつかっていった亡き父の遺志を受け継ぎ、学園教職員とともに皆様の力をお借りし、飛躍、発展させていく所存でございます」と結びました。

挨拶をする後藤泰之理事長と
神尾隆葬儀委員長（左）

日泰寺の広い境内には参列者のための大天幕が設営され、暑さをしのいでいただくための氷柱がいくつも立てられました。告別式は午後一時半に始まり、制服姿の学園設置校の学生・生徒を含む二千人余が参列。次々と本堂に進み、供花に囲まれて微笑む先生のご遺影に向かって手を合わせました。

焼香台で手を合わす設置校の生徒ら

故・後藤淳先生の主な経歴

昭和32(1957)年4月：学校法人名古屋電気学園に勤務
昭和47(1972)年2月：同・理事長（～2016年5月）
　愛知工業大学学長（～2004年3月）
　学校法人愛和学園理事長（～1999年3月）
昭和51(1976)年5月：アジア卓球連合会長（～2001年5月）
　（同年5月より終身名誉会長）
昭和58(1983)年4月：日本私立大学協会理事（～2008年3月）
同年　11月：愛知県知事表彰「教育文化功労」受賞
昭和59(1984)年4月：「藍綬褒章」（教育功労）受章
昭和63(1988)年4月：愛知県私立大学協会会長（～2012年3月）
平成3(1991)年11月：中国江蘇省「栄誉市民（名誉省民）」の称号授与
平成8(1996)年　1月：愛知県日本中国友好協会会長（～2017年7月）
　（同年7月より名誉会長）
平成11(1999)年5月：愛知県体育協会会長（～2007年5月）
　（同年5月より名誉会長）
平成16(2004)年4月：学校法人名古屋電気学園総長
同年　11月：「旭日中綬章」受章
平成28(2016)年5月：学校法人名古屋電気学園学園長（～2018年3月）

弔辞

遠藤守信 信州大学特別特任教授・愛知工業大学客員教授

本日ここに学校法人名古屋電気学園総長　故後藤淳先生の学園葬にあたり、謹んでご霊前に哀悼の辞を申し述べます。

六月一日先生の訃報に接し、落胆哀愁この上なく、残念でなりません。後藤泰之理事長、学長先生はじめご親族そしてご関係者が医師団とともに最善を尽くされたものの、帰らぬ人となられました。

顧みますと、先生は昭和四十七年名古屋電気学園理事長、愛知工業大学学長に就任され、卓越した指導力と先見性をもって学園の発展に尽力されました。平成十六年に総長就任、平成二十八年には学校法人名古屋電気学園学園長に就かれ、とどまることなくご活躍され、教育界と社会に広く貢献を果たされてこられました。そして文武両道の一流校として愛知工業大学、愛工大名電高校を中心とする学園の確かな地位を築かれました。

先生は、学外での要職も多数お務めになりました。教育分野では日本私立大学協会常務理事、愛知県私学総連合会会長、アジア卓球連合会長など、教育、スポーツ、産業の広い分野で要職を多く歴任され、その重責を全うされました。これらのご業績に対して、「旭日中綬章」を受章、日本体育協会「特別功労」受賞等、数多くの受賞の栄に輝かれました。

思えば、先生のご尊父様は地域の人々に信頼され慕われた名歯科医でした。たくさんの患者さんが早朝、暗いうちから列を作っていた評判の医院で、幼かったわたくしも母と一緒に列に並び、またその後、歯科医院を継がれたご令兄様にもお世話になりました。先生は何不自由なく名家でお育ちになり、優れた教育者、学園経営者としての豊かな資質は郷里須坂で育まれたものと推察いたします。旧制松本高・卒業後の一時、栗と北斎で有名な小布施町にある都住小学校で教壇に立たれました。当時の教え子と今日に至るまで深く交流され、皆さんから敬愛され、先生ご自身の教育の原点として誇りになされていた時代でした。神様はあなたの教育者、学園経営者としての類まれなる天賦の才を見抜き、先生の人生にそのような大きな使命を課せられたのでございましょう。そしてその使命を立派に果たされたのでございます。その後の経緯は葬儀委員長様が式文の中でお話しされました。

過日、先生のご案内で名電高校を訪問させていただいた折のことでございます。立派な学園に育て上げられた先生のご業績に感動しきりでございましたが、何よりも驚いたことは生徒さんにお言葉をかけられ、心の通じた絆を確かに持たれていたことでございます。そして生徒さんを見つめる総長先生の慈愛に満ちたまなざしに学園の発展を不動にしてこられたご実績の源を知った次第でございます。

翻って名古屋大学ご卒業の折も直接の恩師で後に第五代名古屋大学総長となられる篠原卯吉教授に将来を見込まれて研究室教官に任命されました。そして初代名古屋電気学園理事長で愛知工業大学学長であられた後藤鉀二氏に嘱望され、奥様和子様とのご縁が結ばれました。さらに名古屋大学の先輩で日本電気学会会長や名古屋大学工学部長を歴任された故家田正之教授、故宮地巌教授と、日本を代表される電気工学の世界的権威から深い薫陶を受けられ、学校法人名古屋電気学園理事長、総長として磨き上げられた天賦の才をいかんなく発揮され、学園の文武両道の名声を不動のものとされました。

私が最後にお目にかかったのは半年前に、病室をお見舞申し上げた時でございました。いつものように未来を見つめながら、これからの学園経営や教育についてお話しくださり、将来にわたって名古屋電気学園は大きな発展を遂げることを確信を持ってお話をされました。先生は、後藤泰之理事長、大学学長にしっかりと王道学を伝授され、後藤尚之事務局長そして教職員の皆様が一丸となって運営する学園組織を立派に構築されました。かかる盤石の態勢で、後藤泰之理事長、大学学長のもと学園がさらに発展されることを確信いたす次第でございます。今は天国で最愛のご令室和子様とご一緒になって、ご遺族の皆様そして学園の発展を見守ってくださっていることでしょう。

後藤淳先生、最後のお別れでございます。遠い空のかなたからご親族の皆様方、学園と教職員そして学園で学ぶあなたがこよなく愛された学生生徒諸君を末永く見守ってください。

先生から多大なご恩を受けた大勢の皆様になりかわりまして衷心から感謝申し上げます。『本当に有難うございました』。

最後となりますが、どうぞ安らかにお休みください。

そして後藤淳先生、『さようなら』。

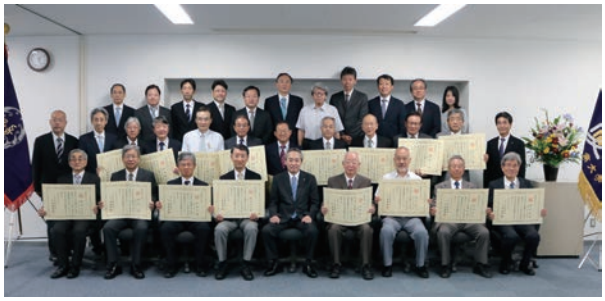
御霊の安らかなご冥福を祈りつつ、深い哀惜の思いを込めてお別れの言葉と致します。

十七氏に名誉教授の称号を授与

学園は七月十七日、愛知工業大学名誉教授の称号を澤木宣彦氏（元工学部電気学科教授）はじめ十七氏に贈り、本学に対する顕著な功績を称えました。名誉教授となられた方々は累計で九十五人となりました。

称号授与式は、学園と大学の幹部が出席して八草キャンパス本部棟で行われました。後藤泰之理事長が一人ひとりに称号記を手渡した後、各氏のこれまでの尽力をねぎらう挨拶をし「これからも違う立場でご助言・ご指導をたまわれば」と語りかけました。これに応え、稲垣慎二氏（元工学部応用化学科教授）が受称者を代表して「今年は過去最大人数の私たち十七名を加えていただきました。私たちは大学が発展する姿を中から見守り、その推進を担ったり、お手伝いをしてまいりました。慌ただしい毎日を過ごしたことを懐かしく思い出しています。いただいた称号を誇りとし、今後は立場を変えて、ますます進化していく愛知工業大学の姿を見守らせていただき、何らかのお役にたてればと思っています」とお礼の挨拶をしました。

名誉教授の皆さん



依田正之氏（元工学部電気学科教授）

澤木宣彦氏（元工学部電気学科教授）

挨拶する後藤泰之理事長

尾之内千夫氏（元工学部応用化学科教授）

井上眞一氏（元工学部応用化学科教授）

稲垣慎二氏（元工学部応用化学科教授）

松本壮一郎氏（元工学部建築学科教授）

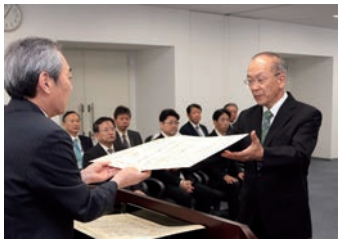
岡田久志氏（元工学部建築学科教授）

渡辺修氏（元工学部機械学科教授）

立木次郎氏（元工学部応用化学科教授）

田村隆善氏（元経営学部経営学科教授）

鈴木達夫氏（元経営学部経営学科教授）



小田哲久氏（元経営学部経営学科教授）

岡崎一浩氏（元経営学部経営学科教授）

吉賀憲夫氏（元基礎教育センター総合教育教室教授）

末永康仁氏（元情報科学部情報科学科教授）

黒河富夫氏（元情報科学部情報科学科教授）

野村重信氏（元経営学部経営学科教授）

高い就職率を維持　全国三位、私大二位

愛知工業大学卒業生の就職状況は、今春も全国三位と好成績を維持しました。サンデー毎日八月五日号に掲載された全国二百四十大学の実就職率ランキングによると、卒業者千人以上の大学の中で本学は実就職率97・1％（前年度＝以下同じ＝97・1％）で全国三位、私大では二位、東海地区では一位でした。

一方、本学キャリアセンターがまとめた平成二十九年度の内定状況調査（確定版）によると、内定率は三学部合計で99・6％（98・8％）で、学部別では工学部99・5％（99・3％）、経営学部100・0％（97・0％）情報科学部99・5％（98・1％）と、いずれも前年度を上回りました。実就職率は、就職率＝就職者÷（卒業者－進学者）と計算するため、就職者を就職希望者で除した内定率に比べ、数値が低くなる傾向があります。

愛名会企業による学内企業展（3月）には最多の682社が参加

学生自身の努力はもちろんのこと、本学後援組織である「愛名会」会員企業によるバックアップのほか、教員の熱心な就職指導やキャリアセンターの様々な支援プログラムなど、学生一人ひとりの主体性を促す総合的なキャリア支援体制により、全国トップレベルの実就職率を維持しています。

※「サンデー毎日」のデータは大学通信調べ

プロジェクト共同研究から十七件の成果を発表

十二回目となる愛知工業大学シンポジウム（平成二十九年度プロジェクト共同研究成果報告）が六月十五日、総合技術研究所視聴覚室で開かれました。産学連携研究推進事業の一環として平成二十九年度は二十一件のプロジェクト共同研究が進められた中、十七件の研究成果について報告がありました。

初めに鈴置保雄所長が「研究者が社会のニーズと出会い、研究に取り込むための重要な機会。共同研究を盛り上げ、これからの発展の方向を探っていきたい」と挨拶しました。建築学科の瀬古繁喜教授による「コンクリート躯体の施工の信頼性向上技術の研究」から報告が始まり、順番に発表された内容は「電子デバイスの純水スプレー洗浄工程における静電気発生防止技術の開発」「自己伝播発熱素材と光技術によるウエハ総合技術開発とその応用」「AIとハイパースペクトルカメラを利活用した建設材料性状の自動評価システム構築」「ライフログや環境データを活用した状況認識手法に関する研究」など多岐にわたり、具体的な実験環境や今後の見通しなどについて活発に質疑が交わされました。

企業と共同で研究に取り組むプロジェクト共同研究は本学独自のマッチングファンドで、公募のうえ採択した研究を総合技術研究所が支援します。企業から提供された研究経費と同額、または全額を本学が助成し、毎年のシンポジウムで成果を報告しています。

AITテクノサロン「電気電子分野の温故知新」

大学総合技術研究所は六月二十九日、第十一回AITテクノサロンを研究所内の視聴覚室で開きました。今回は「電気電子分野の温故知新　玉を磨いて器とす」をテーマとし、電気学科の四教員が身近な技術や材料の見直し・活用について話題提供しました。

地域の企業経営者や学内から合わせて五十二人が参加し、挨拶に立った鈴置保雄所長がテクノサロンの経緯と目的などを話しました。一件目の話題は、森竜雄教授による「塗ってできる有機ペロブスカイト太陽電池の魅力」。有機ペロブスカイト太陽電池は塗布で簡単に作製できる太陽電池で、高性能なセルの作製方法について講演しました。

二件目は、清家善之教授による「電子デバイス製造におけるスプレー技術　～自動車塗装からナノ製膜・洗浄技術まで～」で、電子デバイスの感光材料や有機薄膜のスプレー成膜、スプレー洗浄の幅広い利用技術について解説しました。三件目は、竹内和歌奈准教授による「次世代光電融合デバイスに向けたⅣ族液晶半導体の材料開発」。Ge、SnといったⅣ族元素を複数混ぜることによってさまざまな機能デバイスを作成できることについて話しました。最後の話題提供は小塚晃透教授による「超音波の力学的応用」で、超音波による物体の捕捉・移動技術や超音波霧化技術について紹介しました。

参加者は終了後の交流サロンで軽食をとりながら和やかに意見交換しました。

超攻撃野球、夏の甲子園で勝利をつかむ！

第百回記念大会を見据え整備した後藤淳記念球場で鍛え抜いた「超攻撃野球」が、大きく開花しました。愛工大名電高校野球部は、第百回全国高等学校野球選手権記念大会の西愛知大会決勝（七月二十八日・岡崎市民球場）で東邦高校を9―4で下し、五年ぶり十二回目の夏の甲子園出場を果たしました。

甲子園初戦を突破し、アルプス席へ駆けだす選手たち

甲子園初戦（八月十一日）は二回戦からの登場で、三重県の白山高校との東海対決となりました。2本塁打を含む15安打を放ち10得点、室田祥吾―秋山凌祐両投手の完封リレーにより、10―0の快勝。一九八八年以来、遠ざかっていた夏の甲子園での勝利を三十年ぶりにものにしました。世間の関心は初出場の白山高校に集まりがちでしたが、吹奏楽部とチアリーディング部がリードする大声援は試合の主導権が相手に渡ることを許さず、最後まで選手たちに力を送りました。

先制適時打を放った主将の西脇大晴選手

歓喜に沸くアルプス席

続く三回戦（八月十六日）では東兵庫代表の報徳学園と対戦。安井太規選手が2試合連続となる本塁打を放つも2―7で敗れました。一九八一年以来三十七年ぶりとなる夏の甲子園ベスト8以上の目標はかないませんでしたが、スタンドを紫の名電カラーに染めた大応援団から、堂々と戦った選手たちに惜しみない拍手が送られました。

倉野光生監督にとって初、夏の甲子園に響き渡った校歌

後藤淳記念球場（春日井総合運動場内）は、それまでの練習球場を半年かけて全面改修し、六月に逝去した学園総長・後藤淳先生の名を冠して二〇一六年五月に完成しました。本塁から両翼へは百メートル、中堅へは百二十二メートルと阪神甲子園球場をも上回る規模を持ち、この球場から甲子園を目指してほしいという総長先生の思いが込められています。

継投で勝利をつかんだ秋山凌祐（写真㊨）・室田祥吾（同㊧）両投手

ノーシードから勝ち上がった西愛知大会では七試合中、一点を争った接戦が四試合も。「三回は壁があると選手たちには言ってきたが、まさかそれが四回とは」と倉野光生監督が驚くほど激闘の連続で、勝つたびにたくましさを増した選手たちには、まさに総長先生の思いを乗せたと思わせる力強さがありました。

「球史を刻み続けて夏百回　ああ栄冠は名電健児に輝く」

後藤淳記念球場前に立てられた百回大会記念のモニュメント

甲子園出発前のひととき、激励に訪れた後藤泰之理事長と

高校卓球部がインターハイ学校対抗三連覇（優勝十七回目）

愛工大名電高校卓球部が今夏のインターハイで三年連続十七回目の全国制覇を成し遂げました。個人戦でもダブルスで田中佑汰選手（主将三年）・加山裕選手（二年）が名電として四連覇となる優勝を果たしたほか、田中選手はシングルスでも準優勝しました。

インターハイ卓球競技は八月四～八日に豊田市のスカイホール豊田で開かれ、学校対抗決勝は鶴岡東（山形県）との対戦になりました。一番手の曽根翔選手（一年）は2ゲーム落とした後の猛攻で3ゲーム連取し、逆転勝利。続く二番の田中選手、三番ダブルスの田中・加山選手ともに3―0で完勝、ストレートで優勝をつかみました。

インターハイ3連覇を成し遂げた愛工大名電高校卓球部

逆転勝利した曽根翔選手

高校卓球部は春の選抜と合わせ、これで全国大会七連勝です。後藤淳総長先生の逝去を受けてチームは喪章をつけて大会に臨み、今枝一郎監督は「少しでも恩返しができて本当によかったと思います。地元開催ということもかなり前から意識していましたので、この優勝は格別にうれしいです」と安堵の表情を浮かべました。

日本代表選手たちを擁した昨年のドリームチームとは異なり、今年のチームはチャレンジャーの精神を忘れずに戦い抜きました。今枝監督は「まず私自身が重圧に押しつぶされないように意識しました。『勝てよ』と怖い顔をして選手たちにプレッシャーが伝染するのはよくないと考え、笑顔を忘れず、攻める姿勢を貫くことができました」と振り返ります。

個人戦でも、ダブルスで大会初のベスト8に四組、ベスト4に三組、決勝も同士討ちの活躍。シングルスでも優勝はできませんでしたがベスト8に三人と、名電の力を存分に見せつけました。

田中佑汰選手（右）・加山裕選手は個人戦ダブルスでも頂点に

「田中キャプテンがチームをよくまとめてくれました。プレーだけでなく、私生活でも絶大の信頼をおける行動、活躍をしてくれました。シングルスでは決勝で敗れ三冠王にはなれませんでしたが、団体、ダブルスの二冠とシングルス準優勝という結果は大会のMVPだったと思います」。主将の努力をこうねぎらった今枝監督は「今後も理事長先生をはじめ亡くなられた総長先生、学校、学園関係者の方々への感謝を忘れず、大学、中学卓球部と力を合わせ、世界を目指し、より一層努力してまいります」と、さらなる活躍を誓いました。

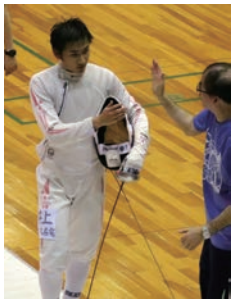
全中卓球個人戦で一～三位、インターハイフェンシング男子エペで準優勝ほか、今夏の全国大会の活躍

名電中学卓球部は広島県立総合体育館で八月二十三～二十五日に開かれた全国中学校卓球大会で、団体戦六連覇こそ逃したものの、個人戦で三選手がベスト4に入る活躍を見せました。

個人戦を制した谷垣佑真選手（写真提供：ニッタクニュース）

個人戦決勝は名電の谷垣佑真選手（三年）と濵田一輝選手（三年）の同士討ちとなり、フルゲームまでもつれる接戦の末に谷垣選手が初優勝、濵田選手が準優勝となりました。また準決勝で濵田選手と対戦した鈴木颯選手（二年）も三位に入賞しました。

このほかにも今夏のインターハイでは、フェンシング部の井上誉聡選手が男子エペ準優勝、バレーボール部がベスト8、水泳競技部の若林佑希子選手が公開競技の女子3㍍シンクロ飛び板飛び込み優勝などの成績を収めました。


男子エペ準優勝の井上誉聡選手

高校吹奏楽部が四十一回目の全国大会出場へ

八月二十六日に名古屋国際会議場で開かれた東海吹奏楽コンクールで高校吹奏楽部が金賞に輝き、東海支部代表として十月二十一日に同会場で開かれる全国大会に四十一回目の出場（高校部門全国最多）をします。

一方、同部のサマーコンサートは七月十六日に日進市民会館大ホール、十九日に名古屋国際会議場センチュリーホールで、それぞれ開かれました。両会場ともプログラムは三部構成で、百八十人の部員が織りなす華やかな演奏が会場の吹奏楽ファンを魅了しました。

伊藤宏樹教諭の指揮により、第一部は二〇一八年度全日本吹奏楽コンクール課題曲の「コンサート・マーチ『虹色の未来へ』」「マーチ・ワンダフル・ヴォヤージュ」など三曲を演奏。第二部の一曲目「シンフォニア・ノビリッシマ」では、同部OBで新任顧問の遠山翔大先生が指揮をとりました。

この後も「歌劇『アイーダ』より『凱旋行進曲』」や、三月末のオーストリア演奏旅行でも披露した「ゴールデン・ジュビレーション」（同部第五十回定期演奏会記念委嘱作品）、シャンソンの名曲「愛の讃歌」などを次々と演奏。第三部の曲目では恒例となった一年生部員たちの楽しい演出や、スタンドの応援風景を再現した「名電野球応援メドレー」も登場し、満席の会場を沸かせました。

サマーコンサートで華麗な演奏を披露する高校吹奏楽部

夏のオープンキャンパスに四千五百二十八人が来場

七月二十一、二十二の両日、大学の夏のオープンキャンパスが八草と自由ヶ丘の両キャンパスで開催されました。両日合わせて四千五百二十八人（高校生二千八百三十六人、保護者千二百四十九人、一般四百四十三人）が来場し、今夏も受験生の関心の高さが表れました。両キャンパスでは各専攻の学生たちが八十を超えるテーマのデモンストレーションを繰り広げ、日ごろの研究成果を熱心に発表しました。

八草キャンパスでは、今年も〝理工系ガール〟を対象にした相談ブースや女子学生によるパネルディスカッションの企画が人気を集めました。大学でインテリアの勉強を志す岐阜県内の女子高生は「幅広い知識が必要になることがデモを通じて分かり、収穫でした」と笑顔を見せていました。

自由ヶ丘キャンパスでは恒例となった「自由ヶ丘キャンパス祭」が同時開催され、近隣の人たちも来場して学生のバンド演奏や屋内イベント、模擬店などを楽しみました。

人気を集めた学生フォーミュラの走行デモンストレーション

防災マイスター講座修了式

第十回社会人防災マイスター養成講座の修了式が七月二十四日、本山キャンパスで行われました。この講座は、職場や地域での災害対策・被災者支援のリーダーとなる専門家養成を目的に、本学の地域防災研究センターが毎年開講しています。講義への出席と各科目レポートを総合評価し、全科目に合格した受講生に学校教育法に基づいて後藤泰之学長から履修証明書を交付しています。

本年度も、企業や地域の防災コミュニティーなどから八人の受講生が参加しました。昨年十月から自由ヶ丘と本山の両キャンパスで、本学や名古屋工業大学、大同大学の教員ら講師から「企業防災論」「建築防災論」などの講義を受けたほか、インターネットを利用したeラーニングや現場実習の防災フィールドワークに取り組みました。

この日は最終の研究発表に続いて修了式があり、優秀な成績を収めた白木峰昌さん、武藤恵子さん、竹内亮平さんの三人が優秀賞の表彰を受けました。ほかの五人も奨励賞を受賞しました。横田崇・地域防災研究センター長が「きょうが終わりでなく始まりと思って実際の活動をしていただければ」と期待する言葉を述べました。

「AIT（愛知工業大学）」の名入りの帽子を贈られた修了者たちは、最後にその帽子を投げ上げて修了を祝いました。

修了を祝って帽子を投げ上げる皆さん

【平成29年度決算の概要】

学校法人名古屋電気学園の平成２９年度決算の概要は、以下の通りです。

資金収支計算書（会計年度に行った諸活動に対応する全ての収入と支出の内容と当該年度に係る支払資金の収入と支出のてん末を明らかにしたもの）

「収入・支出の部合計」は２３８億１千万円となり、「施設関係支出」には、大学バイオ環境化学実験棟建設費用および大学自由ヶ丘キャンパス増築建設費用等が含まれています。

事業活動収支計算書（経常的な収支と臨時的な収支を区分し、経常的な収支は、更に教育活動収支と教育活動外収支に区分することによって、それぞれの収支状況を明らかにしたもの）

「教育活動収支差額」と「教育活動外収支差額」を合算した「経常収支差額」は、△１千８百万円となり、これと「特別収支差額」の５千１百万円を合計した「基本金組入前当年度収支差額」は、３千２百万円となりました。

「基本金組入額」１１億１千万円を組入れた後の「当年度収支差額」は△１０億８千万円となり、これに「前年度繰越収支差額」を合算した「翌年度繰収支差額」は△１０７億３千万円となりました。

貸借対照表（年度末における資産、負債、純資産の財政状態を表すもの）

「資産の部合計」は６３４億９千万円、「負債の部合計」は、６２億９千万円、基本金に繰越収支差額を合算した「純資産の部合計」は５７１億９千万円となりました。

詳しくは、名古屋電気学園ホームページの「事業報告・財務状況【名古屋電気学園 - 学園データ】」をご覧ください。

資金収支計算書

（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

（単位：千円）

収入の部	
科目	決算
学生生徒等納付金収入	9,323,302
手数料収入	401,373
寄付金収入	65,462
補助金収入	1,313,503
資産売却収入	3,414
付随事業・収益事業収入	303,018
受取利息・配当金収入	29,579
雑収入	684,463
借入金等収入	0
前受金収入	1,685,605
その他の収入	418,417
資金収入調整勘定	△ 2,429,700
前年度繰越支払資金	12,018,690
収入の部合計	23,817,126

支出の部	
科目	決算
人件費支出	6,919,036
教育研究経費支出	2,517,804
管理費支出	739,810
借入金等利息支出	7,737
借入金等返済支出	223,867
施設関係支出	1,042,463
設備関係支出	536,328
資産運用支出	100,000
その他の支出	601,751
資金支出調整勘定	△ 981,149
翌年度繰越支払資金	12,109,479
支出の部合計	23,817,126

事業活動収支計算書

（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

（単位：千円）

		科目	決算
教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	9,323,302
		手数料	401,373
		寄付金	65,522
		経常費等補助金	1,293,591
		付随事業収入	303,018
		雑収入	682,251
		教育活動収入計	12,069,057
	事業活動支出の部	人件費	6,872,102
		教育研究経費	4,329,429
		管理経費	908,091
		徴収不能等	0
		教育活動支出計	12,109,622
	教育活動収支差額		△ 40,565
教育活動外収支		科目	決算
	事業活動収入の部	受取利息・配当金	29,579
		その他の教育活動外収入	0
		教育活動外収入計	29,579
	事業活動支出の部	借入金等利息	7,737
		その他の教育活動外支出	0
		教育活動外支出計	7,737
	教育活動外収支差額		21,842
経常収支差額			△ 18,723
特別収支		科目	決算
	事業活動収入の部	資産売却差額	2,340
		その他の特別収入	70,471
		特別収入計	72,811
	事業活動支出の部	資産処分差額	15,263
		その他の特別支出	6,439
		特別支出計	21,702
	特別収支差額		51,109
基本金組入前当年度収支差額			32,386
基本金組入額合計			△ 1,117,431
当年度収支差額			△ 1,085,045
前年度繰越収支差額			△ 9,649,379
翌年度繰越収支差額			△ 10,734,424

（参考）

事業活動収入計	12,171,447
事業活動支出計	12,139,061

貸借対照表

（平成30年3月31日）

（単位：千円）

資産の部	
科目	決算
固定資産	50,685,774
流動資産	12,806,138
資産の部合計	63,491,912
負債の部	
科目	決算
固定負債	3,144,141
流動負債	3,150,025
負債の部合計	6,294,166
純資産の部	
科目	決算
基本金	67,932,170
繰越収支差額	△ 10,734,424
純資産の部合計	57,197,746
負債及び純資産の部合計	63,491,912